

西神屋公園整備にともなう旧墓地の概要



1995

田辺町

ごあいさつ

現在本町では、京都府と一体となって防賀川を“ふるさとの川防賀川”として三つのゾーンに分け順次整備しております。そのなかで“水辺のやすらぎのゾーン”的北部拠点として、西神屋公園を整備しました。

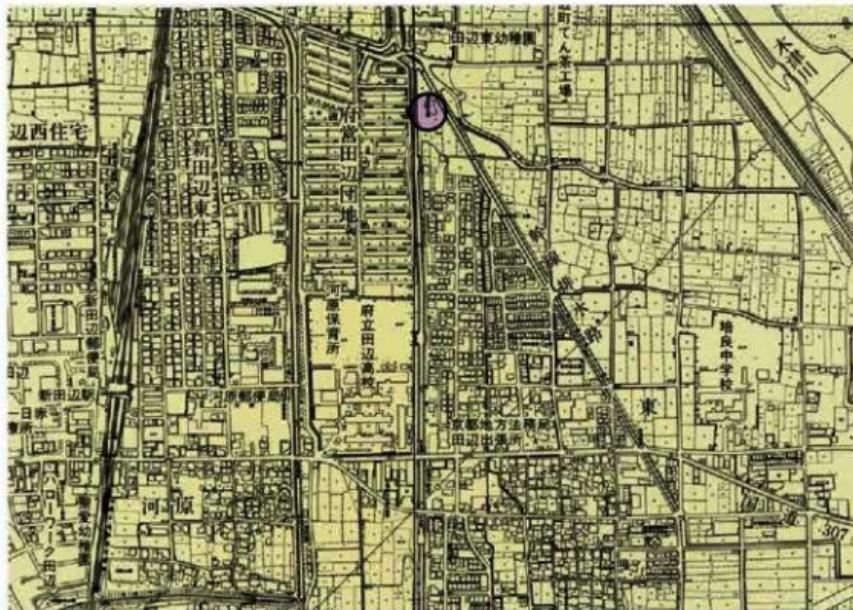
ところで、公園内には東区・河原区の旧墓地が含まれております。これをどのようにするのか、たいへん苦慮しておりましたが、地元の方々のご理解とご協力を得ることができましたので、完全ではありませんが一定の旧墓地の整理を行うことができました。

平成3年度に旧墓地のおおよその範囲を知ることができ、平成5年度には酷寒の時期ではありましたが、東区・河原区両区民のみなさんのご協力のもと整理作業を行いました。その2ヵ年の作業のあらましをまとめたものが本冊子です。ささやかなものではありますが、旧墓地がどのようなものであったのか、記録にとどめておきたいと思います。

最後になりましたが、作業にあたりご協力いただいた方々、東区・河原区のみなさまに厚くお礼申しあげるとともに、今後とも本町発展のためご理解とご協力を申しあげます。

平成7年3月

田辺町長 原田 喜代次



旧墓地位置図

旧墓地と東区・河原区

松村 茂

このたび天井川でもあった防賀川切り下げ工事にともない、町都市整備課により旧墓地の整備並びに周辺部の公園化計画が進んでいたが、この墓地については、以前瓦質の藏骨器が排水路改修工事中に出土しており、中世から続く墓地であると考えられていたので、町教育委員会指導のもとで、東区・河原区両区民が協力し、建設業者とともに雑木等の取り除き作業を行ったところ、中世の藏骨器や近世の埋葬に使用されたカワラケや茶碗が大量に出土した。この墓地が使用されなくなって約100年、近年両区に移り住んできた人も多く、地区の歴史やこの墓地のことを知らない人がほとんどであろう。

ここで両区の歴史を紐解いてみよう。河原区には極楽寺、東区には大徳寺・念佛寺・正光寺等があり、町内でもその歴史は古く、町史等で紹介されているので省くが、文献資料で見る両区は、中世後半には東西河原村と呼ばれていたことが東院毎日雑々記（応永2年・1395）によってわかり、早くより南都興福寺の荘園であり、たびたび水害に見舞われていたことも記されている。

また永享5年（1432）には石清水八幡宮の駕與丁神人役として西河原村の三郎五郎等が



旧墓地全景（南から）



幹線排水路改修工事でみつかった石塔類

任じられており、後世寛永・寛文と続く補人状（大徳寺文書）から東西河原村と石清水八幡宮のつながりは深く、現在も東区から9月15日の八幡宮祭に駕輿丁神人として出仕している。

近年発見された大徳寺文書の中から、大永5年（1525）東河原村惣の帳、天正元年（1573）東村本役の本帳を見る限り、西ノ口、室垣外、久保田、江ノ町等の地名が記載され、その頃集落の中心地は現在の田辺東小学校の東側あたりで、大日堂跡もあり、出土遺物からみても間違いなかろう。東河原村がそのあたりだとすると、西河原村はその西辺と考えるのが妥当で、墓地はその中間あたりに位置する。また、東河原村は東村、西河原村は西村や河原村と村名が変化していったことは、文献からもわかる。南山域はたび重なる水害に見舞われ、上流より大量の砂が押し流され木津川河床の上昇、天井川の上昇により両とも高位置への移転が余儀なくされた。

念仏寺過去帳によると江戸時代末期には墓地周辺の堤切れがたび重なり、明治19年（1886）に現在の地（小字野色）に墓地全体を移転せざるを得なくなつたようである。当時の記録はないが、旧墓地の石碑石仏類のはほとんどは移転され、跡地は荒れるがままに放置されていた。

東区・河原区の年表

西暦	年号	月日	事項	典拠
948	天暦2		綾喜郡・綿郷の地名が出てくる	類聚符宣抄7
971	天暦2		空也上人、樹光山専求院(後の極楽寺)を建立	極楽寺寺伝
1338~44	慶応年間		東河原村念仏寺、法明上人の開創と伝える(浄土宗)	
1394	応永元		極楽寺真了和尚により浄土宗に改める	極楽寺寺伝
1395	応永2		東河原村大賀老貫持參する	東院毎日雜録
1395	応永2	7	田辺の東西河原村に水掘がある	東院毎日雜録
1430	永享2	閏11/8	東河原村大日堂の開口作られる	大徳寺本堂開口
1433	永享5		西河原村三郎四郎、次郎、次郎四郎、右馬四郎則興丁神人役にあたる	石清水文書
1467	応仁年間		山名・細川の党が徘徊し念仏寺など焼払う	念仏寺旧梵鍾銘
1480	文明12		東河原村洪水による損免を訴える	東院毎日雜録
1483	文明15	1/21	森侍者慈伯、東河原村カウシカツシの畠を虎丘庵に寄進するという	田辺町史資料調査
1504	永正元	9/28	東河原村正光寺、中井九郎右衛門が願主となり教念上人により開創(浄土真宗)	中井家文書
1525	大永5	12/20	東河原村惣の帳、本役帳が作成される	大徳寺文書
1528	大永8	2/吉	東川原村惣の定め書が作られる	大徳寺文書
1552	天文21	2/12	大館晴光の知行目録に、草内・飯岡・河原村の名前がみえる	石清水文書
1567	永禄10	2/16	草内乾之介為能が東村大日堂「ミヤかうてん」に東河原村の屋敷を売る	大徳寺文書
1571	元亀2		永春法印が大徳寺(大日堂)を再興するという	大徳寺文書
1573	天正元	9/28	「ヒカシムラノホヤクノヘチャウ」が作成される	大徳寺文書
1623	元和9	閏8	東村、河原村は淀藩領となるが、河原は梅溪家領100石がある	
1630	寛永7		東河原村小川勝右衛門、松崎甚右衛門、石清水八幡宮開興丁神人になる	大徳寺文書
1665	寛文5		西川久右衛門、小川治右衛門石清水八幡宮開興丁神人になる	大徳寺文書
1688	貞享5	2/15	東村大徳寺大日堂の再建が認められる	大徳寺文書
1699	元禄12	10/10	東川原村念仏寺の双盤作られる	念仏寺双盤銘
1703	元禄16	10/15	東村念仏寺の梵鍾が造られる	念仏寺旧梵鍾銘
1746	延享3	2	大日堂の明細を書き上げた記録書が作成される	大徳寺文書
1765	明和2	2/18	大日堂惣座の座中定めが作られる	大徳寺文書
1802	享和2		東村大洪水に罹る	大徳寺文書
1814	文化11		東村大洪水になり、念仏寺も破損する	念仏寺由来記録
1815	文化12		念仏寺を現在の地に移し再建する	念仏寺由来記録
1830	文政13	10	東村大徳寺の明細帳が作成される	大徳寺文書
1845	弘化2	8	西の口堤が切れ、東村が洪水になる	念仏寺過去帳
1848	嘉永元	8	アオンジヤの堤が切れ、東村が洪水になる	念仏寺過去帳
1856	安政3	3/吉	東河原村大徳寺の本堂庫裏が再建される	大徳寺文書
1868	慶応4	5/19	大雨がたびたびあり、山川大水となる	念仏寺過去帳
1881	明治14		田辺・河原二村と藤村との悪水抜井路にかかる為取替証	藤区有文書
1883	明治16		河原村の養福寺が廢寺になり、不動尊・弘法大師像・大般若經等が大徳寺に、本尊地蔵菩薩・觀音菩薩像等は河原の極楽寺に移す	大徳寺文書
1886	明治19		墓地を現在の野色に移す	

平成3年度の概要

平成4年3月2日から3月31日

平成3年度は、地籍図で墓地になっていて、公園整備工事で現状が変わってしまう部分について、そこが墓地であるかどうか、埋葬部分があるかを確かめるため調査を行った。

旧墓地は、まわりの土地より一段高くなっていて、東側を流れる幹線排水路の改修工事の際に多くの五輪塔部材や石仏などがみつかり、それらは地区の北東側に置かれていた。調査は、この高まりの北側に1トレンチ、西側の防賀川との間の谷地になったところに2トレンチ、南側の高まりの上に3トレンチの3ヶ所を設定し、掘削作業を行った。

1トレンチ 高まりの北側で、近年盛土したという所である。1.5mの盛土をとりのぞくと、その下は洪水による砂・粘性細砂が堆積していて遺物などはなかった。墓地は、この付近まで広がっていなかったと考えられた。

2トレンチ 高まりの西側すそ部に南北に長く掘ったもので、すぐ西は防賀川の堤防となり、谷になった所である。埋葬部分は無く、地表下2.3~3mで川原であったとみられる粗い砂になった。

この粗い砂の上に0.5m程粘性の砂質土があり、この上面で五輪塔部材がみつかるとともに地震による粗い砂の吹き上がり（噴砂）が認められた。砂質土の上には、防賀川の洪

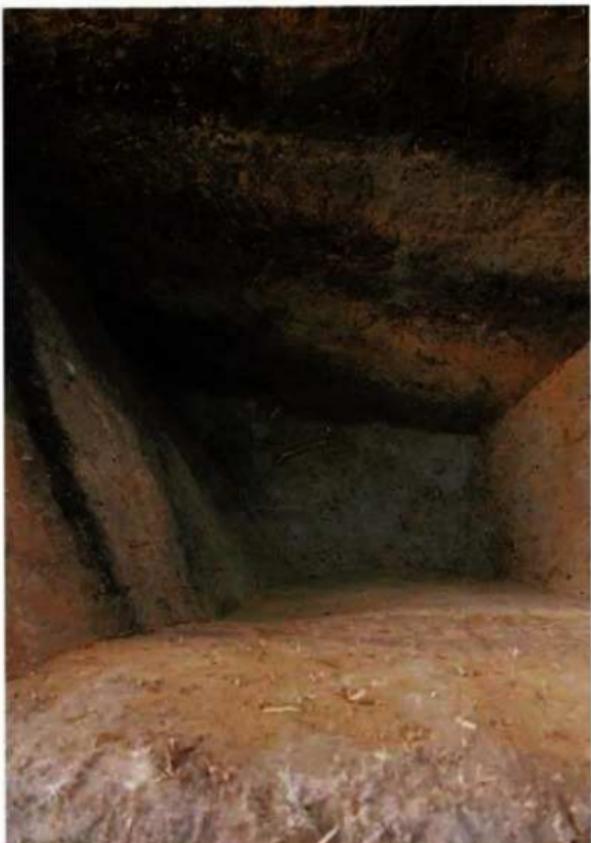


2トレンチ全景（南から）

水による砂・砂礫の層や東側の墓地から捨てられたような焼いた骨片や炭がカワラケ・鉄釘・寛永通宝とともに含まれる層が交互に堆積している状況だった。

3 レンチ 高まりの上を掘ったものであり、埋葬部分がみつかる可能性が最も高かった所であるが、埋葬部はなく、地表下3.2mで2 レンチと同じ粗い砂にあたった。

この粗い砂の上に0.8～1.2m 粘性の細砂、砂質土があり、その中から土よりも軟らかくなつた人骨がみつかっ



3 レンチ（黒色土が3時期確認できる）

た。埋めたというのではなく、細砂・砂質土と一緒に流れてきたような感じを受けた。

細砂・砂質土の上に焼いた骨片や炭・灰・カワラケなどを含んだ土饅頭のような黒色土の堆積が、間に別の土をはさんで3時期認められた。下のもの（古いもの）で中世、上のもの（新しいもの）で江戸時代後半から末頃とみられたが、平成5年度の作業で上の黒色土を掘り込んだ江戸時代後半の埋葬部がみつかり、それよりも古いことがわかった。

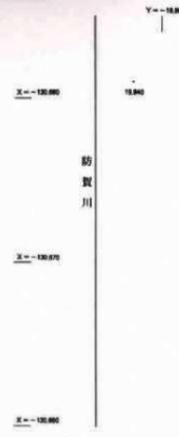
以上により、1 レンチは墓地外であったらしいこと、2 レンチは骨灰などの捨て場所であったこと、3 レンチは中世から続く骨灰寄せ場であることがそれぞれわかった。



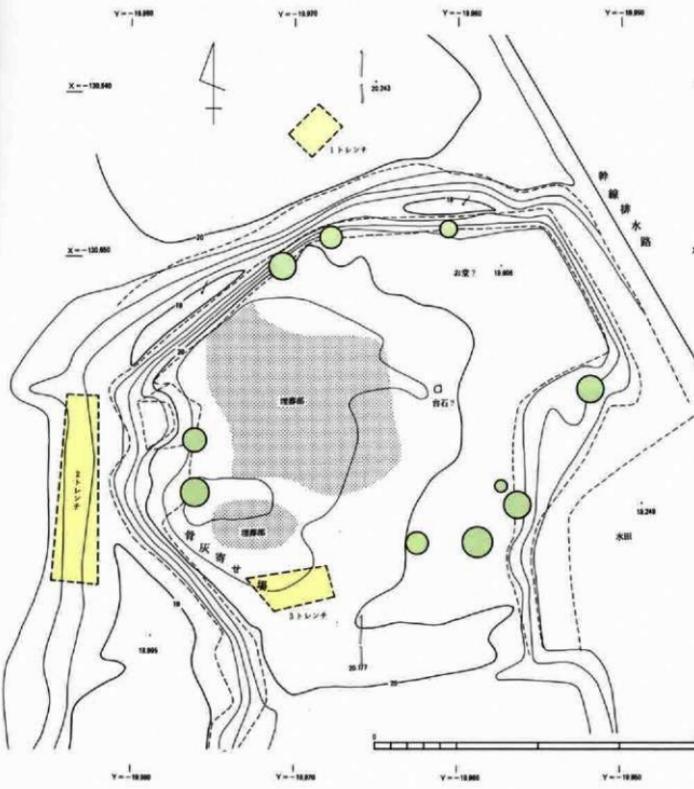
作業風景



作業風景



旧墓地地形図



作業風景



室町時代後半の墓地面にあった石仏類

平成5年度の概要

平成6年1月12日から2月4日

平成5年度は、東区・河原区の皆さんとの協力で竹の根起こし作業を行うこととなり、伐採の後平均1m程の厚さで旧墓地内の土を掘り返した。そのことにより、人骨・土器類・金属製品・石塔類などが多くみつかり、おぼろけながら江戸時代後半から明治初めまでの墓地の様子をつかむことができた。

〈墓地について〉

墓地は大きく上下2層（2時期）にわかれ、地表下1.5m付近が室町時代後半頃の地面だったようである。この高さのあたりから多くの五輪塔部材や石仏がみつかった。これより下からは、室町時代の火葬骨を納めた骨壺がみつかった。骨壺には素焼きのナベや瓦質の釜が使われているが、釜の外側には煤がついていることから、日常使用していたものを骨壺にしたことがわかる。この時代の墓地部分がわかったのは、幹線排水路寄りの排水管埋設部分だけであり、墓地全体の範囲などは不明である。

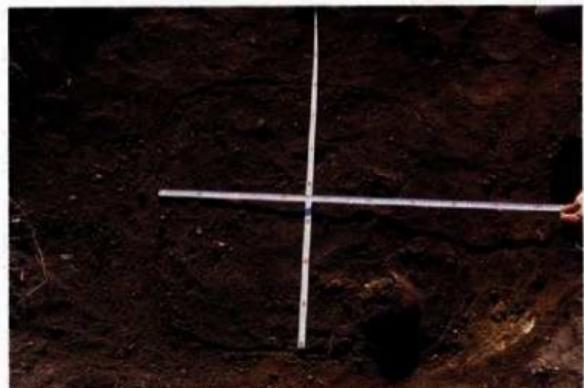
上層部分が室町時代末から明治18年まで使われた所となるが、数多くみつかったカワラケや茶碗などの陶磁器は江戸時代後半の1700年代後半以降1800年代のものがほとんどであった。



作業前の供養

この時期の墓地は、現在も残っている木で閉まれた部分であり、しかもその中の西側部分のみが埋葬部として利用されていた。埋葬には箱形の座棺が使われていたようであるが、棺は残ってなくわずかな土の変化から一辺50cm角や70cm角程度のものがあった。東側部分からは舟形五輪塔板碑などの石塔類が多くみつかった。北東部分からはほとんど何もみつかっていないため、お堂のような建物があったことが推定される。南西部分には直径6～7m程の骨灰寄せ場があり、たくさんの細かい焼いた骨や炭がみつかった。

埋葬部からみつかった土器類は、江戸時代後半以降のものであり、埋葬もその時期であると考えられる。舟形五輪塔板碑などは江戸時



一辺70cmの植跡



人骨出土状況



並んでみつかった人骨



最大の舟形五輪塔板碑（高さ82cm）



墓地中央部の石（台石か）

代前半までのものであり、埋葬人骨より古い。骨灰寄せ場の黒色土からは寛永通宝が多くみつかり、また黒色土を掘り込んだ埋葬部が見つかっているので、平成3年度には江戸時代後半から末頃と考えたが、江戸時代前半頃の骨灰寄せ場であると考えられる。

江戸時代後半の石塔類は、明治19年の墓地移転の際に念仏寺などへ移したものとも考えられるが、江戸時代前半の埋葬部がさらに下にあるのかといったこと、平成3年度に3時

期確認された骨灰寄せ場との関係はどうかということ、東区・河原区の戸数の割に埋葬部分がせまく、みつかった人骨も少ないことなどわからない点も多い。

<遺物について>

平成3年度及び5年度にみつかった土器類は、整理箱につめて20箱分である。ほとんどが土師器と呼ばれる素焼きの皿（カワラケ）であり、灯明皿に使われていたものもある。陶磁器類では青磁・瀬戸焼・唐津焼・信楽焼・京焼などがある。紅皿と呼ばれる小さな白い皿も多い。

ほかには伏見人形と呼ばれる人間や動物などをまねた土製品や銅錢（寛永通宝など）、キセル、鉄釘などもみつかった。銅錢では六道錢の名のとおり6枚重なったままみつかったものもある。鉄釘は棺をとめるのに使われていたものである。



人骨再埋葬

これらの遺物は町内でも数少なく考古学的に重要なものである。

<石塔類について>

平成5年度あるいは幹線排水路工事の際、多くの石塔類がみつかった。ほとんどは五輪塔部材であり、舟形五輪塔板碑、板碑、石仏がある。舟形五輪塔板碑などは年忌の時などに供養塔として立てられたものであり、石製であることは、当時かなり裕福であったことを示している。年号の刻まれたものをみると、天文19年（1550）から延宝4年（1676）までのもので、室町時代後期以降江戸時代前期までとなる。これよりも古い年代のものは、さらに下層に埋まっている可能性もあるが不明である。一方、これよりも新しい年代のものは、明治19年（1886）の墓地移転の際に、あわせて移転したと考えられる。

これらの石塔類のなかには、美術史的に貴重なものも含まれている。

なお、平成5年度の作業にともないみつかった約100体分の人骨は、平成3年度にみつかった人骨片とあわせ、平成6年3月14日に両区民代表立ち会いのもと、木箱2箱に納め再び埋葬した。

紀年銘石塔類一覧

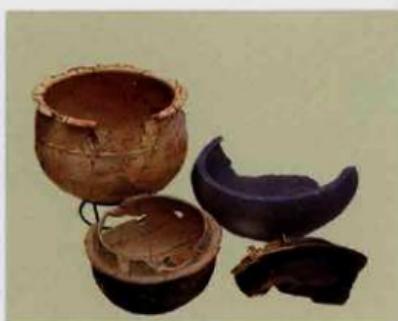
年号	西暦	名称	種子	戒名
天文19年10月18日	1550	五輪塔(地輪)	アン	道口禪門
慶長2年8月16日	1597	舟形五輪塔板碑	修行門	妙祐禪尼
慶長19年11月21日	1614	板碑	キリーク	道久信士
元和4年3月8日	1618	舟形五輪塔板碑	発心門	妙生禪定尼
寛永6年正月6日	1629	舟形五輪塔板碑	発心門	道善禪定門
寛永9年9月12日	1632	舟形五輪塔板碑	キリーク	妙光
寛永10年3月2日	1633	舟形五輪塔板碑	キリーク	道音
寛永20年10月4日	1643	舟形五輪塔板碑	ア	西心禪定門
正保3年12月22日	1646	舟形五輪塔板碑	発心門+阿弥陀三尊	淨貞禪定門
万治3年11月15日	1660	舟形五輪塔板碑	発心門	妙香信女
延宝4年12月12日	1676	舟形五輪塔板碑	阿弥陀三尊	了室妙休信女
不明		舟形五輪塔板碑	発心門?	
7月24日		舟形五輪塔板碑	発心門	道金
なし		舟形五輪塔板碑	なし	道心
なし		舟形五輪塔板碑	不明	妙金
年なし 6月□日		舟形五輪塔板碑	発心門	道久
なし		舟形五輪塔板碑	不明	
不明		舟形五輪塔板碑	不明	
5月24日		舟形五輪塔板碑	発心門	道源
なし		舟形五輪塔板碑	なし	妙法
なし		舟形五輪塔板碑	キリーク	宗西
なし		舟形五輪塔板碑	発心門	妙清
なし		舟形五輪塔板碑	発心門	道慶禪定門
なし		舟形五輪塔板碑	なし	□子
□□ 10月18日		舟形五輪塔板碑	不明	道善
年なし 6月8日		五輪塔(地輪)	なし	道珍
なし		五輪塔(地輪)	なし	妙珍

* アン、ア、キリークはいずれも阿弥陀仏を表わす。

* 発心門はキャラカラバア、修行門はキャラカラーバーアー。



カワラケ



骨壺



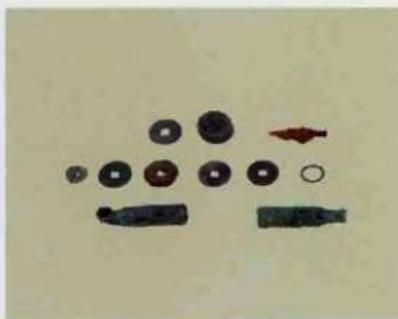
陶磁器（花立てなど）



陶磁器（茶碗など）



伏見人形



銅錢・キセルなど

参考文献

京都府立山城郷土資料館企画展資料11『惣村から近世の農村へ』－綾喜郡東村の歴史－ 1990
〈凡例〉

1. 本書は、京都府綾喜郡田辺町大字東小字西神屋1番地の1に所在する旧墓地の整理作業の概要である。
2. 本書の執筆は「旧墓地と東区・河原区」を東区の松村茂氏が、他を田辺町教育委員会社会教育課鷹野一太郎が担当し、全体を鷹野が編集した。なお、「東区・河原区の年表」は松村氏が作成したものに鷹野が参考文献から一部加えたものである。

